

勝利の喜びの裏に

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年4月2日

フィギュアスケートを見ていると私はいつも、華麗さの裏にある“痛さ”を、想像してしまう。というのは、実は高校時代に水泳の飛び込み競技をやっていた。3メートルの飛び板飛び込みと10メートルの高飛び込みである。

どんな技も、まず1メートルの台から始め、高さをあげていく。始めたころ、身体は全身あざだらけだった。選択種目である宙返りの練習の時だ。どこで身体を伸ばして入水していいのか、そのタイミングが全然わからない。早すぎると、伸びて回転した身体ごと水面に思い切りたたきつけられる。

不思議なもので、くりかえすうちに水が近づく感覚わかり、水面めがけて手を伸ばし、水をつかむように入水できるようになった。

ただ試合に出るには、まだ選択種目の種類が足りなかった。その日は朝から、何となく恐怖心があった。板の端に後ろ向きに立ち、飛び上がって前宙返りをする種目の練習を始めたところだった。飛び込み台にかぶさるような感じになるので、ちょっとこわい。回転途中でやめようと思わず身体を伸ばし、顔から飛び板の上に落ちた。高校1年の夏だ。

それでもやめようと思わなかったのは、空中にふわっと浮きあがり、クルクルと回り、シュポッと水に飛び込む快感を、一度、身体で覚えてしまったからだ。

翌年から試合に出るようになった。台の上に立ったら一人だ。誰も助けてくれない。

これは私のささやかな経験である。むろん世界選手権の安藤美姫とは比べようもない。ただ金メダルが確定し、キャーッと叫んだ瞬間に、彼女は、これまで一体どれほどの心と身体の痛みを乗り越えてきたのだろうかと思った。